

# Salut

蓮興院寺町倶楽部のニューズレター「サリュ」通巻46号2005年秋号

サリュ——「ハリス」の巻  
2005.AUTUMN

イバン・イリイチ  
「生きる意味」より抜粋

われわれは徹底的に無力です。われわれは芽生え始めた他者との友情をさらに拡大していく道を探ろうとして、対話を行っています。そして、その場合の他者とは、自己の無力さやわれわれの結合された無力さとともに味わうような他者なのです。私は一個の原子でもなければ、一個の美でもありません。世界を一個の全体としてとらえる以上、人間の時代は終わった、あるいはとつくの昔に終わっているという事実から目をそらすこととするのとは対極的な雰囲気を生み出すことができるのは、いまこの現在を、それが世界を救うのに役立つからではなく、美しいものであるからこそ祝福しうるようなセンスです。そうした饗宴の場では、自覚的に、生命に對置されるかたちで、いきいきと生きることこそが祝福されているのです。

2005  
AUTUMN





1957年福岡県出身。日本大学芸術学部入学後8mm映画デビュー作『高校大パニック』を撮り、熱狂的な支持層を得る。その後も斬新で前衛的なアクションを撮り続け、82年『爆裂都市Burst City』を発表。84年の『逆噴射家族』はイタリアの第8回サルソ映画祭でグランプリを受賞。国内のみならず海外でも高い評価を受ける。近年の代表作としては『五稜雲戦記』(00)、『ELECTRIC DRAGON 80000V』(01)など。今年で、監督生活30周年を迎える。

# 「模倣」こそ創造の原点。 カオスを超えて、 表現の力を磨く。

## 観客と「他者」と出会う

高校までは福岡でした。子どもの頃から表現欲求だけはみ出るほどあったけど、その方法が分からなかった。音楽や漫画やアートやいろいろやってみたけど、うまくいかず、いつもがいていた。その思いが初めてぴたっと来たのが8ミリ映画でした。76年に、19歳の時、『高校大パニック』を創りましたが、稚拙ではあったけど、自分の中でのすごい

應典院コミュニティシネマの第1弾は、石井聰互監督のハイビジョン映画「鏡心」でスタートとなりました(05年6月)。19歳のデビュー以来、監督生活30周年を迎える石井監督が、いま技術革新の著しい世界において、映画を志す者にとって、本当のオリジナリティとは何か、を語ります。

## 映画監督 石井聰互さん

# 心に憶い かつ実行せよ

強情をなくし謙虚な態度で、  
時に応じて師のもとに行け。  
ものごとと真理と  
自制と清らかな行いとを  
心に憶い、かつ実行せよ。

「スッタニパータ〜ブッダのことば」

應典院寺町倶楽部の  
ニュースレター  
**サリュ**

Vol.46

Top Interview  
「模倣」こそ創造の原点  
カオスを超えて、表現の力を磨く  
響きの宇宙 風の曳航  
…… 1

報告  
モンゴル僧声明十長屋和哉の供音  
…… 4

報告  
現場の声に聞く舞台芸術の鼓動  
〜大阪経済大学特殊講義ルポ  
…… 12

Salut Gallery  
應典院に集うアーティストたち  
…… 16

Space x Drama2005  
「創造」と「つながり」を語る…… 18  
〜それぞれの新たな一歩

High school Play Festival 報告  
シアトリカル 應典院 JTRA  
…… 23

対談  
市民社会における「対話の力」とは何か…… 24  
〜哲学、芸術、宗教の息づく場づくじ

秋田光彦主幹から…… 30  
…… てんてこまい



▲石井監督、20代半ばの頃（前列中央）。映画撮影の仲間と。

クリエティブであるということは、自分が表現したいものに磨きを入れるということです。単なる思いつきではありません。一瞬のひらめきを表現にするために確かな技術と粘り強い精神力が必要です。それとますます周囲の環境が多種多様化していきますから、自分の表現についての説明能力も求められます。いま「一般論」が成り立たないほど、多様化が進んでいて、それだけ私たちは

手応えがありました。それまでは自分でも手に負えない「衝動」と格闘していたんですが、8ミリ映画を手にする事で、一気に「創造」へ動いた感覚があります。

それと、初めて自分の表現が他者に褒められた、評価されたことにも戦慄を覚えました。それまでは表現の中で自分を閉ざしていたのですが、自分の映画を通して人とのつながりを感じました。普通の友人がスクリーンの前で観客に生まれ変わる。「他者」と出会ったというか、表現どうしがつながるって、すごい力を生むということを実感しました。

それは、自分の中では、決定的なことだった。そこが原点です。

東京の大学に進学してからも、ずっと映画製作に浸かっていて、仲間と自主製作映画のグループ狂映舎を創りました。

撮影の現場はいつも混沌としていて、ただ手探りで進むしかない。誰も先例のないことを自分たちは拓いている、という自覚がありました。『88万分の1の孤独』（77）『突撃！博多愚連隊』（78）などを発表しました。

当時は憑かれたように映画を創っていました。ここにいる生身の自分とは違う、誰か別の力によって創らされていると

いう感覚が常にありました。遠い視線に見つめられているというか。主観的に生きている自分と、もう一人創造を突き動かす自分がいて、そいつがいつも「これを形にしないで」と叫んでいました。

3日も寝ていないのに、疲れも全然感じないで、異様に頭が高速回転していて、必死で鉦脈を掘っているという感覚ですね。『狂い咲きサンダーロード』（80）なんか、撮っている間はずっとそうだった。

### 最初からオリジナルはない

20代の頃は映画を撮っていないときは、ずっと映画を観ていました。レンタルビデオのない時代ですから、映画館に通い詰めです。

芸術はすべて「模倣」から始まる、と思います。表面上の形であるか、その創られ方の在り方であるか、作品の魂の部分であるか、あるいはそのミックスであるか、いろんな形があるでしょうが、先達の優れた仕事、自分の魂に強い感動を与えた作品に学ぶのです。自分も、最初は映画をどう創ったらいいかわからなくて、作品の魂だけは自分

混沌の中にいるわけですが、その中でどう個人として生きていくのが、問われていると思う。

映画の技術革新も日進月歩で、選択肢がものすごく増えました。もうフィルムだとかデジタルだとかこだわっている時代ではない。でも、だから、もう昔のやり方は通用しない、ではなくて、今までを踏まえた上でこれからのやり方を開発していくべきだと思います。そこは若い人が知恵を尽くしてほしいところでもあります。

じつは来春から神戸の大学の先端芸術学部で教えることになりました。映画を志す学生に授業を受け持ちます。今は映画への道はすべての人に開かれています。門を開くも閉ざすもあなた次第です。しかし過激なまでの多様性の中で安定したモデルは存在しない。そういう中で自分を問われる。オリジナルティーを問われる、という時代です。

だから、やはりしっかりと過去の作品を観て、模倣するところから始めてほしい。また私も若い学生たちから模倣をいただいで、それを乗り越えて自分のオリジナルティーに高めていきたい。そこが楽しみです。

私は19歳で監督になって、来年監督生活30年を迎えますが、その考え方はいまも変わりませぬ。

# 唸り。應典院を震わせた

## モンゴル僧声明十長屋和哉の供音



この夏、應典院で、モンゴル仏教僧の読経と長屋和哉氏のパーカッションとの共演「響きの宇宙 風の曳航」が開催されました。

戦後60年という節目にあたる本年、モンゴルと日本の仏教文化の交流のため、そして未来の平和のために、世界規模の願いと音楽を発信しようと、東京、京都、大阪、松本の寺院や能楽堂など5カ所で6公演を行ったものです。語り尽くせない公演の感動、そして公演が実現した経緯や、その成功を支えた人々の協働の足跡を紙面に再現します。

(取材・文 編集部)

### モンゴル仏教の情熱

2004年5月、長屋和哉はモンゴルへ赴き、現地の仏教僧たちの美しくも力強い読経とのコラボレーションを行ってきた。彼をモンゴルへ駆り立てたものの中から、まず、モンゴルの仏教についてふれてみたい。

モンゴルとチベット密教との関わりは古く、16世紀まで遡る。当時のモンゴル王であったアルタン・ハンはチベット僧、ソエナム・ギャツォをモンゴルに招き、彼にダライ・ラマの称号を与えた。この称号が現在まで続いているダライ・ラマ制度の始まりである。

2005年8月4日、阿弥陀仏の見守る應典院本堂ホールにモンゴル僧の声明と長屋和哉パーカッションの音が、響きわたった。本堂を埋めた百余名の人々の静かな感動の声を拾ってみよう……

「天上を散歩するような、不思議なひとときを過ごせました」

「たるんだ細胞の二つ二つを呼び覚ましてくれるような音の響きでした。音と音が重なり、調和して宇宙の涯まで届いたのではと思いました」

「地底から響いてくるようなモンゴルの声明に、魂の深みに届く長屋さんの器樂が呼応して、とても平安な気持ちになりました。朝からの頭痛が治りました」

「初めてモンゴルの声明を聞きました。私自身が供養されているような不思議な感じでした」

「自然と宗教と音楽が一体化しているようだった」

その日、應典院は確かに震えた。それは、その場、その時間を共有した人々の細胞のひとつひとつが震撼したからだと言えるだろう。モンゴル僧の声明と長屋和哉の音に託され、届けられたものはいったい何だったのであろうか。



## 草原に生きるモンゴルの子もたちに黑板を

モンゴルパートナーシップ研究所「黑板プロジェクト」

草原の国モンゴルの風景と人々の写真、そしてモンゴルの子もたちが描いた絵の数々が、公演当日、應典院のウォールギャラリーを飾りました。協力いただいたのはNPO法人モンゴルパートナーシップ研究所（以下略称モビ）です。この日入場者に配った切り絵と風景の絵はがきも、モンゴルの文化を感じてほしいとモビから寄贈されたもの。ここでは多彩なモビの活動の中から「黑板プロジェクト」をご紹介します。

1992年に民主化を果たしてから、急激に市場経済化へ移行したモンゴルでは、日本を筆頭としたさまざまなODA（政府開発援助）が行われ、結果、都市と草原との生活格差がますます広がる悪循環を招いています。モビの活動理念は、援助ではなく、友人同士としての対等な関係に立つ、文字通りのパートナーシップ。経済から医療福祉、教育、調査研究など多岐に及ぶ活動分野のいずれにもその精神が生きています。中でも「黑板プロジェクト」は草原で学ぶ子もたちへの具体的な「応援」のかたちとして、2002年に開始、今年夏までに622枚、291校への配布をなしました。

なぜ「黑板」なのか、と問われる方は少なくありません。草原に生きる子もには何もかもが足りないのです。ほとんどの学校が60年代に建てられて以来改修されることはなく、教材はおろか机やイスもぼろぼろ、暖房もままならない状態です。ウランバートルの学校にはコンピュータがあるのに、都心から離れば離れるほど教育格差が広がっています。けれども、ハイテクの洗礼を受けるはるか以前に、授業でまず使われ、学年を超えて不特定多数の子もたちのまなざしを集めるものは「黑板」なのです。それは一部の子もたちに一時的に贈られるものではなく、草原の暮らしから多くを学んで生きる子もたちが、さらにより広く世界への扉を開くために重要な最初の扉だとも言えるでしょう。

またモビの黑板プロジェクトは、個人もしくはグループが黑板1枚につき2万円を寄付すると、支援者の名前が記された黑板がどこの学校に届けられたかが明確になる、いわば支援の形が目に見える仕組みになっています。そして、贈った方がその場所に行きたくなったとき、いつでもその学校を訪ねることができます。黑板は、道なき道を、モンゴル在住のスタッフが自らトラックを運転して、手渡しで届けられます。黑板に託された未来への願いは、きっと草原の子もたちの胸に届くことでしょう（談）。

NPO法人モンゴルパートナーシップ研究所  
<http://www14.plala.or.jp/mopi-ngo>

それ以降、モンゴルにおいて仏教は民衆にまで広まり、深く信仰されてきたが、20世紀に入り、ソビエト連邦の社会主義革命、続くスターリンの政権掌握を受けて、その粛清の嵐はモンゴルにまで及び、多くの寺院が破壊され、僧侶が虐殺された。以降、60年に及ぶ粛清の時代に寺院の多くは壊滅し、仏像は壊され、経典は捨てられた。寺院における僧の学問研究で培われたかつての膨大な知識と伝統は失われてしまったのだ。

しかし、その信仰はついでに消えなくなり、1990年初頭になって共産主義体制が瓦解すると、モンゴル仏教は再びその力を盛り返していく。弾圧を逃れ、平原の岩の亀裂に身を隠した僧侶たちの衣鉢を継ぐかのように、若い僧侶たちはチベットなどへ留学し、学位を獲得してモンゴルへと戻ってきた。

再建された寺院では、学問研究だけでなく、新年の大祈願祭を筆頭とした年中行事や毎日の勤行といった儀式の実践が行われるようになった。貧富の格差が凄まじい勢いで広がった不安定な社会情勢のなかで、いまモンゴルの仏教は民衆の心の拠りどころとして確かに存在している。

そして、今回来日し、声明を披露した僧侶たち

は、そのほとんどが20代。まさに、粛清にもついでに、多くの失われた命と知識を回復しようとするモンゴル仏教の情熱を体現する若き僧侶たちだ。

### 「原爆忌」そしてモンゴル

長野県松本の神宮寺住職高橋卓志が、モンゴルの首都ウランバートルにある彼らの寺、ダシチヨイリン寺院を訪れたのは、2005年1月のことである。

神宮寺では毎年夏の1週間、広島・長崎の原爆で倒れた人々の追悼を通して、今に生きる私たちの「いのち」のあり方を問う「いのちの伝承」プログラムが組まれ、「原爆忌」の法要が行われる。昨年の「原爆忌」で音の祈りを捧げたのが、八ヶ岳山麓を拠点に活躍する打楽器奏者・長屋和哉だった。

金属製のパイプで組んだ檐に、いく種類もの民族楽器や仏具などを配し、独自の音を、時に繊細に、時に激しく打ち鳴らす。神宮寺の「原爆忌」で祈りの宇宙を作り出した長屋が、モンゴルの寺院で行った声明とのシヨイント録音を耳にした

時、高橋は、驚きに似た感動を味わう。大草原のただ中に響き渡るかのような、大いなる祈りの音。人のやさしさと、躍動するいのちが、聴く者の身にひとしく降り注ぐような、そんなひととき。この時高橋をゆり動かした感慨が、彼をモンゴルへと誘い、そして日本各地での公演を実現させたと言っても過言ではないだろう。かくして、高橋は

厳冬のモンゴルへと飛び、依頼を快諾したダシチヨイリン寺院の長老ダンバシヤブ氏と6名の若き僧侶たちの来日が決まった。

そして、神宮寺の高橋の呼びかけにこたえる形で、應典院での公演は決まった。

## モンゴル僧が應典院にやってきた!

モンゴル僧が應典院にやってくる!そして、本寺の大蓮寺に泊まることになった。その時、私たちスタッフの頭には数々の?が駆けめぐった。チベット密教ってことは、肉は食べない?女性に触れない?お布団で寝るの?いやまず昼ご飯は何を出せばいいだろう?—疑問と悩みは尽きなかった。しかし、その存在感を十分感じさせた彼ら(以下モンゴルズ)のことを思い返す時、私たち日本人の「心配事」のなんとスケールの小さいことか。モンゴルズは気持ちも身体も大きかった。そして、お買物好きだったのだ?!

7月末、モンゴルズは成田に降りたち、東京のお寺などで3公演、京都は清水寺での奉納と能楽堂公演を終え、猛暑の大阪にやってきた。「サインバインノー!」で、まずは挨拶。モンゴルズは実は戒律に対してはおおらかなようなので、お昼ご飯はうどん付カツ丼定食にした。あつという間に完食。さて、リハーサルまでの間大阪を案内しようかと切り出し、日本最古の四天王寺や一心寺の骨仏はどうかと聞くのが良くない。京都で日本の寺は堪能した様子だ。結局向かった先は大阪城。みんななぜかデジタルカメラを持っていて、さかんに撮りあっている。あまりに暑いのでかき氷をつつくと、長老のダンバジャブ師も兄貴格のアルタンフーもガリガリ、チュウチュウ。傑作だったのは、秀吉と淀君の(とおぼしき)書き割りコーナーで、開いた穴に顔をつっこんでみるのだが、どうも顔が入りきらない。それでも、本当に楽しそうに写真を撮っている。貴乃花似のオトゴンバヤルは、土俵入りのまねを披露してくれたりする。そうこうしているうちにリハーサルまでもう1時間、歴史博物館で涼んで帰ろうと思ったら、モンゴルズが何やら相談を始めた。彼らは「大阪のまちを見たい」らしい。秋葉原をすくく気に入っていたという情報を思い出して、日本橋は避けねばと判断し、法善寺から地下街を通過して應典院へ戻ることにした、つもりだった。なのに、車を降りた場所が悪かった。ビックカメラの前だったのだ。私が横断歩道を渡ろうと言う前に、吸い寄せられるように店内に入っていくモンゴルズ。ええーっ、ダメダメ!と叫んでも知らんぷりで、勝手に集合時間を決めている。さらにひどいのは、その時間になっても誰も降りてこないこと。モンゴルズの辞書に時間という文字はないのだ。私と神宮寺の杉本さんは、まるで羊飼いの犬のように7階だてのビックカメラを走り回った。

結局、リハーサルはほとんど出来ずじまいで本番を迎えた。それでも、あんなに素晴らしい声明を披露してくれたモンゴルズ。遅れて行った打ち上げで、「お布施だから」とビールを注いでくれたモンゴルズ。とても素敵な、それでいて台風みたいだった彼らにバイラレー、ありがとうを贈りたい。

(モンゴル僧ショートツアー案内人・田中いづみ)

### 「見えないもの」への想い

應典院でモンゴル僧が声明を披露する。独自の音楽性に強い支持を得る長屋和哉が共演する。それは、一種のヒーリングミュージックのコンサートであつたならば、格好の舞台なのかもしれない。けれど、應典院はコンサートホールではない。紛

れもなく寺なのだ。

寺で僧侶が読経を捧げる。これはれっきとした法要である。

奇しくも今年は、戦後60年の節目の年。この節目は私たちにとってどのような意味を持つのだろうか。確かに60年前、私たちは多くの尊い命、多くの大切なものを失った。しかし、それ以後現在

までも、それ以上に多くのかげがえのないものを失ってきてはいないだろうか。

かつて、計り知れない痛みと苦しみをもち、多くの尊い命を落とさせた戦禍。そのさなかには誰もが持っていた「平和への願い」。この願いなくして、「平和」な社会を築くことはできただろうか。今、このふりかえりの地点に立つ時、改めてそのことに気づかされつつある。

いつのまにか失ってしまった、そして今も失いつつある「願い」。形を持たない、心の抛り所とも言うべき「見えないもの」に気づく場を創りたい。それが應典院がこの公演を行う意思である。この意思が鍵となり、数々の扉が開いた。

例えば、モンゴルの今が物語るものへの気づき。——1990年代、社会主義が崩壊して、急速に行われたモンゴルの市場経済化は、集団農場や牧畜生活を営んでいた遊牧の民の生活を激変させ、爆発的な貧富の格差を産み出した。またこのころ、大草原をおそった二度の寒波で、膨大な数の家畜が死に絶え、すべてを失った遊牧民たちが首都ウランバートルに流れこんで浮浪者となった。

そして、そんな親に見放され、路上生活を余儀なくされた子どもたちは路上にあふれ、酷寒を生

き抜くために地下のマンホールで暮らすようになった。いわゆる「マンホールチルドレン」である。「ミミが散乱し、ネズミが駆け回るマンホールの中で、親から受けた虐待の痕が残る子どもや、暴行をうけ妊娠した女の子までが「暮らしている」という。

日本で生活する私たちには到底想像できない「暮らしている」。……。タシチョイリン寺院の若い僧侶たちは、はからずもこの子どもたちと同じ地平に立って、日々祈り、暮らしている。

仏教が再び人々の心をとらえ始めたモンゴルで、彼らは、子どもたちに「生きる願い」を届けようとしているのである。

かたや、社会体制の変化にともなう荒廃した世相のなかで、苦しみを抱えているモンゴル。かたや、戦後60年を経て経済的繁栄を享受しながらも、どこかで大事なものを欠いてしまった日本。生まれ育った境遇にかかわらず、抛り所をもとめてさまよう人の心には共通なものがある。だからこそ、今私たちに必要なのは、「見えないもの」に気づく「想像力」なのだろう。



ここで、公演をふりかえってみよう。

まず、本堂に登場したのは地元浄土宗寺院の若手僧侶の会「三帰会」。「コンサートではなく「法要」として、阿弥陀仏に浄土宗の声明を捧げた。特筆すべきは出を待っていたモンゴル僧たち、舞台わきの狭い通路でその大きなからだを折り重ねるように固まって、読経の一言一句を逃すまいとするかのように聴きいつていた。その姿に、国や宗派を超えて仏教に帰依する者のぬかすく美しさと、無垢なところをかいま見たように思う。

そして、三帰会僧侶たちに散華された蓮華の花弁を縫つように、本尊の前にオンザット（読経のリーダー）のボヤンデルゲルが現れた。

「ボヤンデルゲル氏の声明が始まった時、とても原始的なところを揺さぶられるような、今まで感じたことのない『祈り』の本質的なもの——平和や衆生の救済——にふれた思いだった」（開催後アンケートより）

これは、おそらく、その場に居合わせた誰もが感じた思いであろう。圧倒的な繊細さを持ちながら、どこまでも響いてゆくような力強さが、彼の

声の中には  
充溢してい  
る。



声明は独唱「宝蓮華」から仏具に米を盛り塔を建てるかのような「曼荼羅供養」を経て、長屋和哉のソロ、そして長屋と僧侶たちのコラボレーション「観世音菩薩の真言」へと続いてゆく。長屋が聞き手となったモンゴル僧とのやりとりも楽しいものだった。蒙古斑を持って生まれながら同じモンゴロイドの親近感が漂う。そしていつしか公演はクライマックスへ。「長寿・幸福・友情・平安を願う」と題されたおそらくは祭礼で供される器楽合奏というべき声明に、長老僧ダンバジャプ師も加わって壮大な音宇宙が顕された。

## 慈しみの雨

さて、この大いなる「法要」において導師をつとめたとと言えるのは、長屋和哉だ。公演を構成し、自らも演奏した現実の次元を超えたところで、彼の果たした役割はあまりにも大きい。「観世音菩薩の祈り」、モンゴル僧に彼が依頼したコラボレーションにその思いは顕在化している。すべての演奏を終えた後、長屋は語り始めた。「菩薩の慈悲——それは、あらゆるいのちとともにあろうとするものだ。貧しいために失われる命、世界のどこかで今も続く戦禍。豊かであるかどうか、力を持つかどうか、が生命の価値を決める現代の社会。



しかし、生きとし生けるものはすべて菩薩の大地にあり、菩薩の慈悲はあらゆるいのちに寄り添うものだと思ふ。「彼の言葉は、まるで観音菩薩が降らす慈しみの雨のように、優しく、けれど圧倒的な力強さで、本堂に座した人々の心に

降りそそいだ。

「モンゴル僧の声の魂と長屋氏の音の融合が、平素あるべき魂の回帰をさげんでいるようであった。長屋氏の最後の言葉が心にしみみた。魂の回帰がひとりでも多くの人に伝わるように、せむきとその思いを広めてほしいと感じた」（開催後アンケートより）

モンゴル僧の大地から湧き出るような声と、長屋の創り出す音、そして言葉は、ひとつの「願い」となり、應典院を震わせた。そして、観客は、実は観客としてでなく、彼らとともに「願い」を何かに届ける存在として、その魂を震わせた。嬉しいものとしてそこにあったのである。

モンゴル僧たちは、その後神宮寺での「原爆記」を高橋とともに勤め、ダシチヨイリン寺院へと帰っていった。彼らを迎えた夏が終わわり、秋の彼岸を迎えた9月23日、應典院で十一面観音像の開眼披露が行われた。縁あって應典院にましました美しい観世音菩薩は、あらゆるいのちに寄り添う「願い」の象徴として、慈愛に満ちたその表情で今日も私たちを見守っている。

## 大経大特殊講義ラインナップ

- 第1回 4月26日(火)  
『演劇をマネジメントする』  
大阪経済大学 講師：西島宏
- 第2回 5月10日(火)  
『行政の文化政策／演劇の専門性を高める試み』  
大阪市立芸術創造館・岡本康子さん
- 第3回 5月17日(火)  
『企業の文化戦略／ビジネスとしての劇場』  
HEP HALL・丸山啓吾さん
- 第4回 5月24日(火)  
『小劇場の実際／  
現場で生み出される創造的な関係』  
ウイングフィールド・福本年雄さん、寺岡永泰さん
- 第5回 5月31日(火)  
『まちづくりとアート／  
演劇による「にぎわい」再生』  
中津芸術文化村ピエロハーバー・田阪剛さん
- 第6回 6月7日(火)  
『アートカフェの挑戦／  
ことばとこえてコミュニティをつくる』  
コクルーム・上田假奈代さん、飯島秀司さん
- 第7回 6月21日(火)  
『演劇と教育／舞台からコミュニティを創造する』  
應典院・池野亮光、柳澤尚樹
- 第8回 7月5日(火)  
『都市と演劇のクリエイティブな関係』  
大阪経済大学 講師：秋田光彦

近年、多くの大学でアートマネジメントの学  
科が新設されたりと、文化政策に対する関心は、  
世間的には高まっているように感じます。しか  
し、職業としてのアートマネージャーに対する  
認知度はまだまだのように思います。実際、芸  
術文化に対する支援などはお寒い限りですし  
……。

今回の特殊講義では、企画段階から関わりま  
したが、アートの仕事の現場にふれるというこ  
とにまずは意義を感じました。若い学生が、自身  
がアートマネージャーになる、ならないは別に

しても、そこで仕事する「人」にふれ、生の声  
を聞くことは、世界観を広げるためにも有意義  
なことだと思いました。

特に今回は、演劇の現場「劇場」にフィー  
ルドワークに出かけたわけですが、劇場とい  
ってもバックボーンが様々です。行政施設の  
大阪市立芸術創造館、私企業が経営するHE  
P・HALL、一個人の思いによって運営され  
ているウイングフィールドや中津芸術文化村、  
COCOONなど、多くの現場に出かけたのも、  
バックボーンの違いによって、感じるものも違

# 現場の声に聞く舞台芸術の鼓動

## ～大阪経済大学特殊講義ルポ～

大阪経済大学人間科学部・長田寛康教授からの要請で、同大  
学の特殊講義を應典院が監修、「演劇をマネジメントする～舞  
台からコミュニティへ～」と題して、4月26日より全8回の講  
義が実施された。

芸術を社会に結ぶ仕事と現場について学ぶのがこのたびの講  
義のねらい。現場で活躍するアートマネージャーにふれ、学生  
たちは何を感じ、学んだのか。この講義の企画から参画、ほぼ  
全講義に同行いただいたシアトリカル應典院マネージャー・西  
島宏さんに聞きました。(取材・文 編集部)





うだろうという意図からです。けれど、こういう風に分類してみると、應典院というのは特異な場だと、改めて感じますね。

私は、一回目の講義を担当しましたが、この講義の全体像を伝えると同時に、先にも書いたように、その現場で働く人、また「場」そのものの魅力を感じてほしいと伝えました。講義が始まるまでには、何を伝えるべきかを悩みました。施設の構造や意味を伝え、その場を訪れるだけならば、一風変わった「社会見学」にすぎないものになってしまうし、かといって専門的すぎる内容を伝えるのは学生の興味とミスマッチに感じ、最終的に「人」にスポットを当てたいと考えたわけです。

実際に現場を訪れて学生たちの反応を見ると、こちらが意図したものは十分に伝わったのではないのでしょうか。劇場という「場」には、今までに訪れたことがあるかもしれませんが、そこにいる「人」に出会うことは、ほとんどなかったと思います。各劇場のアートマネージャーが語る仕事の醍醐味や苦労、また現在の仕事を選んだ経緯は、ほとんど初めての世界である学生たちにとって、ひじょうに刺激的だったの

ではないでしょうか。

ここ数年、価値観の多様化が進み、コミュニティの再生が求められている中で、ようやく舞台芸術、特に演劇や劇場に対する認知もされてきたのでしょうか。

けれど、演劇や劇場関係者が描くように理想的に物事が進んでいくわけではない。劇場を取り巻く環境で何かが変わったのか、というところという訳でもない。

芸術文化がしっかり根付いているとされる欧米で、おもしろい話があります。芸術文化理解度が高い国として我々がイメージするフランス。一生涯のうちにオペラ座へまったく足を運ばないパリ市民が、実に八割をしめる。でもオペラ座がいらぬというパリ市民は一人もいない、ということです。日本における芸術文化も、社会にほんとうの意味で根付いていくにはこれ

からも長い時間が必要でしょう。それには、アーティストはもちろん、その周辺にいる現場の人々の努力が欠かせません。

今回の講義で、現場の「人」の声を聞いたことで、学生たちの中に小さな変化が生まれたならば、大きな成功だったのではないのでしょうか。その小さな変化が大きくなるとなると、芸術文化が社会に根付いていく歩みにつながっていくのだと思います。

が生まれる「場」である應典院であるからこそ、意義深い講義だったと思います。

来年度も、同様の講義が行われ、私が関わることになっていきます。今回の成果を踏まえつつ、より芸術文化の魅力を感じてもらえるような講義を目指したいと思っています。そして、学生の中に、また小さな変化を巻き起こしつつ、芸術文化が社会に根付く一歩を築いていければと考えています

今回の講義のコーディネーター役に、應典院に白羽の矢が立ったと

いうことは、意義深いことですね。単なる小屋ではなく、数年に渡る多様な活動が評価されたということでしょう。何事もそうですが、ひとつの価値観で物事が動くのは、いい面よりもリスクの方が多いいのではないのでしょうか。多様な価値観

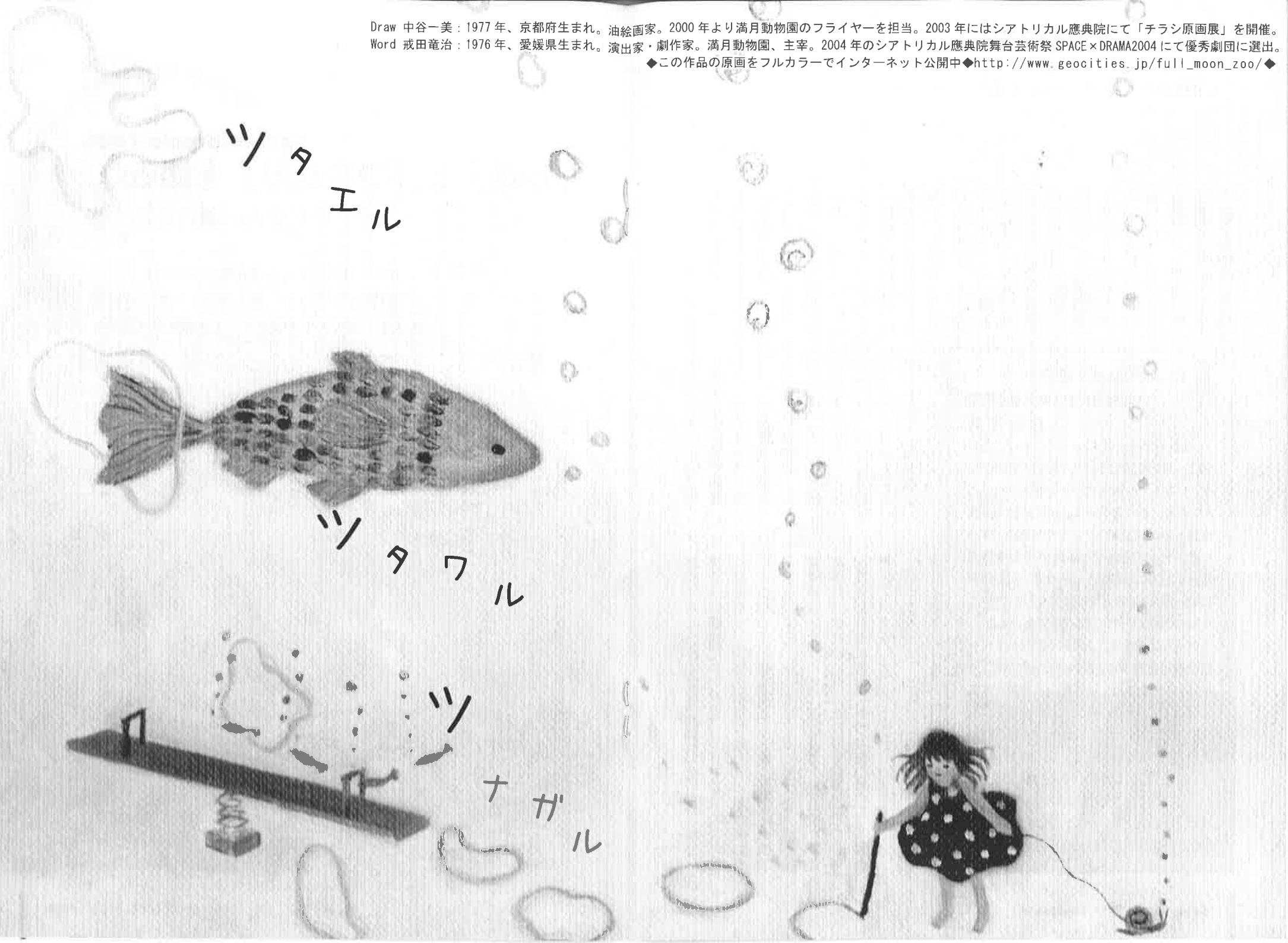
### 特殊講義を終えて 大阪経済大学人間科学部教授 長田 寛 康

「演劇をマネジメントする」の主たる目的は、演劇を通して文化と社会とを結び付けている人々の現実の世界を体験させることである。その意味では、公立施設・商業施設・小規模施設・アングラ的施設・オルタナティブ的施設と演劇事業の多彩な側面を見ることができ、かつそれらを運営している人々の生の声を聞くことができ、当初の目的は十分に達成できたといえる。

受講した学生は、おそらくその大半が一般企業に就職すると思われるけれども、そういう世界を知っている社会人を輩出する意味は大きい。最初は興味本位で受講した学生も、回を重ねるにつれ、文化に対するマインドの種が芽生え、少し成長したように思う。授業に対する学生の満足度も高く、それは、やはりシアトリカル應典院スタッフが、多くの若者と接し、今まで培われてこられた修練の賜物であると考えている。



Draw 中谷一美：1977年、京都府生まれ。油絵画家。2000年より満月動物園のフライヤーを担当。2003年にはシアトリカル應典院にて「チラシ原画展」を開催。  
Word 戒田竜治：1976年、愛媛県生まれ。演出家・劇作家。満月動物園、主宰。2004年のシアトリカル應典院舞台芸術祭 SPACE×DRAMA2004にて優秀劇団に選出。  
◆この作品の原画をフルカラーでインターネット公開中◆[http://www.geocities.jp/full\\_moon\\_zoo/](http://www.geocities.jp/full_moon_zoo/)◆



ツタイル

ツタワル

ナガル

城田●まずは、山内さん、隕石少年トースターの優秀劇団選出おめでとうございます。山内●ありがとうございます。はじめから、優秀劇団に選ばれることを目標にやってきましたので、この受賞はうれしいし、これから劇団を続けていく原動力になります。ですが、正直なところ最近では、この演劇祭で得た一番の収穫は、参加した他の劇団と交流していく中で、みんなと一緒に創り上げていこうという「想い」と「つながり」だったと考えるようになりました。

城田●そうですね。今回は、昨年にも増して、参加劇団のみなさんの活躍が光ったと思います。ブログサイトの立ち上げや、劇団同士の交流、今回は結果として成果には現れ

ませんでしたが、ハイスクール・ブレイ・フェスティバルとの連携を試みたりと、お仕着せではなく参加したみなさんが中心になった演劇祭、たっと思えます。

城田●space x dramaは、年々、進化していると思いますよ。成長する演劇祭と言う感じ。この3年間、つづけて参加させてもらいましたが、最初は正直、戸惑いました(笑)。何をどうしていいのか主催者である應典院サイドも手探りみたいでした。でも、去年、今年と應典院のやりた方向性もはっきりしてきましたし、それによって劇団側にも主体性が出てきましたよね。これは、自分たちで創りだす演劇祭なんだって。

城田●なるほど。戒田さんが主宰される満月動物園は、昨



年優秀劇団に選出されてから、1年間休んでの公演でしたが、成果はいかがでした？

戒田●昨年の作品は、それまで6回ほど應典院で公演をさせてもらっていて、その総決算として、應典院でしかできない作品を目指したんです。無理を言っつて、應典院主幹の秋田さんにも出演しても

## 「創造」と「つながり」を語る

— それぞれの新たなる一歩

ゲスト：戒田竜治さん（満月動物園主宰）

山内直哉さん（隕石少年トースター主宰）

聞き手：城田邦生（シアトリカル應典院スタッフ）

今年も7月から8月にかけて開催された舞台芸術祭「space x drama」。若手5劇団（隕石少年トースター、ネコノハナ劇場、特攻舞台Baku・団、仏団観音開き、劇団製造迷夢）と昨年優秀劇団に選出された満月動物園を加えた6劇団が協働し、真夏の應典院を彩りました。このたび、昨年と今年、それぞれ優秀劇団に選ばれた主宰のお二人をお招きして、座談会を行いました。





戒田竜治さん  
1976年、愛媛県生まれ。本名同じ。満月動物園園長（主宰）。満月

動物園の上演全作品の演出・脚本を担当。シアトリカル應典院では他団体への提供作品も含めて、これまでに7作品を上演してきた。2004年のspace×drama参加作品『庭園楽曲』では秋田主幹の出演を実現するなど、年3～5本のペースで旺盛に新作を発表し続けている。座右の銘は「逆境は笑い飛ばすためにある」。

さんも感動してくれると思っています。  
山内●ぼくは、自分が面白いと思う内容を役者、スタッフと共同作業で創っていきたい。脚本を書く前の段階から、みんなと相談して創造することを心がけています。トップダウンではない創り方が面白いものを生み出すと思うんです。それこそ、吉本新喜劇じゃないですけど、子どもから

おじいちゃんまで楽しめるものを創りだすためには、必要な作業なんですね。最終的には、ぼくが作品の責任は持ちますが。  
城田●今後、お二人は、どういった活動を続けて行こうと考えていますか？  
山内●まずは、続けていくことが大事ですね。  
戒田●そうそう、正直、続けていくことが一番難しい。  
城田●なかなか儲かりませんからね。  
戒田●儲かるためにやっているわけじゃないんだけど、生活できなきゃ終わりですから。ぼくの場合、会社員をやりながら演劇を続けることを選択したわけですが、例えば、社会人野球なんですね。プロではないけれど、プロに負けないものを創ってという

のよい俳優を舞台上に上げたら名作になると思ってるんです。でも、ぼくが魅力を感じているのは、極端な言い方をすれば、訓練されていない身体。サラリーマンや主婦が、普段、仕事や家事で使っている筋肉だけを最大限駆使して表現できれば最高だなと。それを引き出すための脚本であり、演出でありたい。それと同じ視点で、「場」に対しても取り組みたいですね。應典院であれば、壁が白いから難しいっていうんじゃないかと、壁が白いからこそできることがあると考えるんです。  
城田●つまり、それがどんな素材であれ、そのよい部分を引き出せれば成功って事ですよね？  
戒田●そう。成功だし、お客



山内直哉さん  
1978年、大阪府生まれ。隕石少年トースター主宰。脚本・演出を担当。関西大学の演劇サークル「劇団展覧劇場」で脚本・演出を経験。卒団後、東京の日本テレビシナリオスクールでテレビドラマを勉強。2004年春、サークル時代の仲間と共に「隕石少年トースター」を旗揚げ。

らったりして。

山内●それって、すごいですね。

戒田●パフォーマーとしてのご住職、という表現が正しいかどうかは分かりませんが、たとえばお経を読まれる声であるとか、声明の響きであるとか、説法をされる立ち姿であるとか、そういうものをもっと多くの人に見ていただきたかったですし、それは應典

院でしか成立し得ないことでもあると。それにspace×dramaという枠組みは最適だろうと思ってる……で、その公演を機に丸々、1年間、スバツと充電期間に入ったんです。それから1年の間、次に向けてと考えた時に、今度は、どこにでも持っていけるコンテツで勝負したい。そこで、「光の三部作」と銘打って、テーマを連動させ應典院を皮切りに三つの劇場で公演をすることにしました。その初めの公演としては、自分では、手ごたえは感じています。もちろん、これで完璧という訳ではないですけど、次につながるという意味で。  
城田●お二人が作品を創作する上で、心がけていることはありますか？  
戒田●根源的に言えば、状態

のよい俳優を舞台上に上げたら名作になると思ってるんです。でも、ぼくが魅力を感じているのは、極端な言い方をすれば、訓練されていない身体。サラリーマンや主婦が、普段、仕事や家事で使っている筋肉だけを最大限駆使して表現できれば最高だなと。それを引き出すための脚本であり、演出でありたい。それと同じ視点で、「場」に対しても取り組みたいですね。應典院であれば、壁が白いから難しいっていうんじゃないかと、壁が白いからこそできることがあると考えるんです。  
城田●つまり、それがどんな素材であれ、そのよい部分を引き出せれば成功って事ですよね？  
戒田●そう。成功だし、お客

## シアトリカル應典院とHPF

HPF実行委員会 事務局長  
大阪府立茨田高校 吉田美彦

HPF（大阪高校演劇祭）をシアトリカル應典院で開催して、3年が過ぎた。

4年前、シアトリカル應典院をHPF会場にお願いしようと訪ねたとき、主幹の秋田光彦さんが、「表現の形ばかりを追い続けるのではなく、高校演劇も、しっかりと地に足をつけた活動をするのが大切なではありませんか」とおっしゃったことが、ずっと私の耳から離れないのだが、今年の参加校にアンケートをとってみると、次のような回答が寄せられた。

- ・スタッフの方々の仕事の大変さ、ご苦労が身にしみてわかった。
- ・スタッフの方々からのサポートが適切で、やさしく、気持ちよく公演ができた。
- ・スタッフの協力により、校内公演ではできないことに挑戦でき、演劇に対する意識が高まった。

スタッフへの賛辞が並んでいる。このスタッフこそ、HPF最大の誇りともいえる、大阪の小劇場演劇に関わっている若手演劇人達なのである。

かつてのHPFは、とある専門学校に劇場も、財政基盤も依存していたが、現在は、毎年実行委員会を立ち上げて、人集め、資金集めから始めていく、手作り演劇祭である。理念は高いが、基盤は至って脆弱である。そこを、強力に支えてくれるのが、スタッフチームの存在である。スタッフチームは、身銭を切って、経験の乏しい高校生の舞台が少しでも魅力あふれる舞台となるように、わざわざ学校訪問を重

ねてくれて、プランの作成までサポートしてくれる。公演までにスタッフチームに対する盤石の信頼が、高校生の側にできあがっているのだから、公演後のアンケートにこのような言葉が並ぶのは当然すぎる結果ともいえる。

顧問と生徒に限られていた高校演劇の世界が、HPFを通じて一気に外に広がり、多様で無限の舞台芸術の世界に高校生が初めてつながっていく。HPFは、芸術の世界に生きる若者と、その世界に初めて触れて感動を手に入れた高校生との交流を本格化させる「場」として、今、ようやく成長段階に入ったのではないだろうか。

かつて、ある仏教校が公演するとき、急遽、大黒幕を降ろして、ご本尊の前で読経を始めたことがあった。それまで開演前の作業であわただしかった劇場が、一瞬にして静寂に包まれた。スタッフも、いつもは見慣れていたはずのご本尊を、そのときばかりは手を止めて拝顔していた。誰もが、その「場」を共にして、開演という新たな出会いを迎えようとした時間であった。

私はそういう「場」の様々なシーンに立ち会えることを何よりも喜びとしている。演劇祭として継続させていくには、根本的な問題点が山積しているのが現状ではあるが、この3年間、シアトリカル應典院を「場」として生まれたあらゆるシーンを宝として、また次の夏への準備を始めていきたいと思っている。

ないか、それが、会社員である僕らが演劇を続ける意味になっていくんじゃないかと思っんです。3年間、space × dramaに参加してきた、その辺りがクリアになってきたかなと思っっています。

山内●ぼくらは、まだ、戒田さんのようなはつきりとしたビジョンがあるわけじゃないのですが、幸い来年のspace × dramaにも参加させてもらえる機会をいただいたので、應典院で今年できなかったことにチャレンジしていきたいと思っっているんです。演劇祭全体の運営はもちろんですけど、個人的には、この應典院の空間を最大限生かして、時間をかけて完成されたコメディを創りあげたいですね。

城田●最後にお二人の應典院に対する想いを聞かせていただけますか？

山内●それこそ、さつき戒田さんが言った話じゃないですけど、ハイスクールプレイ・フェスティバルとのかかわりとか、應典院の持っているネットワークとか、とても魅力的な要素が内包された「場」だと思っんです。ぼくら自身、



それをもっと活かせる力をも身につけたいと思っっています。ひとまずは、来年のspace × dramaを成功させることが大事ですね。

戒田●お寺で何かが起きていっるっていうのが、本当に面白い。それが何であれ、うごめいていっるっていうか、生きていっる感覚が非常に強く伝わってくるんです。そんな劇場って他にはないし、普通はお寺にもないものでしょう？だからこそ、ぼくは興味をひかれるし、今後も劇場と劇団という関係だけじゃなく、もっと積極的にかかわっていききたいと思っっています。

城田●今後よろしくお願ひします。本日はありがとうございました。

# 市民社会における「対話の力」とは何が 哲学、芸術、宗教の息づく場づくり

西川 勝 vs 秋田光彦



専門的知識を持つ人と持たない人、利害や立場の異なるひとびと、そのあいだをつなぐコミュニケーション回路を構想、設計するコミュニケーションデザイン。「対話」の重要性は市民社会においてもよく指摘されるところです。このたび大阪大学が設立したコミュニケーションデザイン・センター(CSCD<sup>※</sup>) 特任助教授であり、また京都市長寿すこやかセンター研究員の西川勝さんと應典院主幹・秋田光彦がこれからの「市民の知」のあり方について話しあいました。

## 専門性への問い

秋田 ●僧侶も介護士もいわゆる資格に保証された「専門職」なわけですが、西川さんはこれまで専門性のあり方に対し、疑問を投げかけていますね。

西川 ●昔この仕事をはじめたころは、看護師として患者さんと新しい看護関係を結び社会に出ていってもらおうとはりきっていました。でもこれは考えてみれば、患者さんにとって迷惑ですよ。徐々に段階を踏んだ社会復帰の道筋を考えているつもりですが、そんな簡単ではない。医療、看護でないところで、その患者さんが、例えば服、靴を買う、様々な暮らしの支援がないと、ずたずたにされてしまうわけ。その人を楽にするというのはこちらの押し付けで、社会性を高めようというのはただ介

護者だけがやってもだめなんですね。

でも、そのことを専門職は考えない。看護は看護のことしか考えないのが問題です。また患者さんからの相談も、カウンセリングや精神疾患の精神的分析なことなど、勉強をしていますので、そこで導き出される答えを与えると表面的に落ち着くのはわかるんですが、後で自分がむなしくなるんです。何言っても言いかわらないような人間として目の前に立たないんですよ。様々な答えをもっているから、来たとたんにかう答えようと思っている。患者さんはこの「答え」を持つているから安心して相談してくれるんですよ。でもそれだけだとどこかで違うという気がずつとしてるんですよ。

秋田 ●應典院というお寺をやってきて僧侶とは何の専門職なのか、

ずっと問いを抱えてきました。宗教のプロとは、一般には祭祀のプロであり、葬儀やお墓、先祖の供養を中心にサービスを提供している。でも、應典院みたいに葬儀をしない、と宣言しちゃうと、僧侶の社会的な定義ができなくなる。だから私なんかはみ出ていくから、「イベント坊主」と呼ばれるわけですが(笑)。

方や市民活動が進化してくると、看取りやグリーフケア、葬送などターミナルにかかわる市民が登場してきて、すごいスピードで僧侶の専門性が相対化されていきますね。すると、儀礼の執行こそしているが、果たして僧侶の専門性とは一体何なのか、という激しい問いが浮上してくるわけです。でも僧侶自身が長く浸ってきた従来の専門性の囲いから出ることができないので、市民の問いに対し、



相変わらず職業的仏教用語で応えようとするんですね。だから、全然仏教の知が市民社会に活かされていない面がある。

西川●そうですね、専門性を高めれば高めるほど、逆にうそくさいものを感じてしまいます。答えのない、資格にも結びつかない哲学に対する、専門以外の、医療以外のものがあるはずだという思いが強まってきたときに、鷲田先生の臨床哲学というコンセプトに出会いました。これは要するに今までの哲学は喋りすぎていた、だからただ「聴く」哲学をしようということ。あらかじめ設定した問題に対してすごい回答をし、できるといふ力を見せるような、哲学として何々を語るところから、社会のベッドサイドに行つて、聴くということをしてみたときにどのように自分たちのところに開か

れていくのか。臨床現場ではただ聴くしかなかったわけです。

哲学の一番大事なものは、問いを探すということ。ところが社会の現場に向いていって「臨床哲学って何なんですか」っていう質問にさらされてしまうんです。語るためではなくて、社会へ「聴くために」出ていったわけだけども、社会の反応はやはり「臨床哲学って何ですか」なんです。秋田●應典院を始めたのもそう。仏教も答えなんかないから。でもみんな答えがあると思っっているわけですよ。

### 市民の知を開くこと

秋田●最近、ダンスにはまっています。

るそうですね。

西川●病院でALS<sup>\*</sup>という難病の患者さんにコンテンポラリーダンスを見てもらいました。自在に体を動かせるダンサーの動きを体が動かなくなったALSの患者さんが見て、自然と座位が下がってくるはずの患者さんが起き出してくるんです。ダンスを見て感動している。それは無言のメッセージでしたけど強烈なものを感じました。ここで、ケアというのは



いけれどもひとつのありがたい二人の関係、場が出来たわけです。でも僕たちがすごいと思つてここに収めてしまったら、もうまた胡散霧消してしまうものなんですよ。それを次にどういう風に表現するかと考える。

秋田●それを市民の知恵にしているというか、結論や正解がないものを一つ一つの現象、目に見える、多くは通過していった小さな思い出程度のことしか残らないものをどうやって次の社会を切り開くための知恵としていくのか。素材としていくのか。そういう意味での学問に対する期待がありません。

西川●言葉ですべて言いつくせるとは思いませんが、少なくとも言葉で言い切れることは言い切りたい。でも言葉はある意味切り取ってしまうわけで、過剰になったり、

過小になったりする。直接的な体験は、そこで過不足ないわけですよ。それを言葉にしようとしたときに、不足が生じる。直接的な体験というのはそこで閉じてしましますからね。

だからアートだとか、なんとか表現しようとするわけですよ。

### 西川 勝さん

1957年大阪府生まれ。大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任助教授。京都市長寿すこやかセンター研究員。 commons festa 2000にて、大阪大学臨床哲学研究会として初めて「臨床哲学Cafe & Bar」を開催。お茶やお酒を飲みながらたいの言葉の聴きあう「哲学」の場をつくった。その場は「哲学カフェ」として引き続き2003年までcommons festaにて開催、毎年大好評だった。



それは一種のなぞだったり、問いかけを含むものとしてしか語られない。語りつくしてしまうものは決して表現ではないだろうし。秋田●だから「場」がおもしろいんだと思います。言葉で客観的に整理される前の、体験とか感覚とか、そういう生ものに正直に反応できる「場」が必要だろうな。アートもそうですけど、「ようわからんのかやけど」その一歩手前のポジションにいるというのがいちばん創造的なのかもしれません。

### 「びんね」「びやなご」を 超えろ

秋田●應典院で8年間活動をしなから、ずっと実績を追いかけました。スタッフにも成果とか評価を求めてきた。いわば加算法のベクトルがベースにあったんです。

が、だんだん歳とともに私の中で変化が生じていて、逆に引き算しながら、肝心なことは何か、を選ぶようになってきてるんですね。

これまで「できない」のが不安で「できる」ことにこだわってきたけど、今は「できない」ゆえの、ありのまま、つて何だろうと考えるようになりました。

西川●引いていくという話で、何か才能があるからそれを育てるという意味で應典院があるのではない、できないということをして、できないようにさせる、そういう場でもあるわけですね。

表現の小さな可能性を見つけていくというストーリーは山ほどあるんだけど、思う存分失望、負けてもいいということがないですね。

秋田●こける前にこけないように配慮する社会ですから。表現のな

かに自分を問い直す場をここに求める人が探しているとしたら、そういう場にいる私たちは、一体どういう関わり方をしたらよいかと考えます。

西川●僕もそこをもう少ししっかり考えていきたいと思う。長田弘さんの詩の中に「人生はやめてしまったこと、できなかったこと、ほとんどできてきている」という内容の詩がある。臨床の場では、どんなにできなくなっていくことが多く、無数のできないことでやっとなのでできることがある。だからできないこと、やめてしまったことの意味はすごいある。人間は歳をとるとどんどんできなくなったり、やめていく、そのことが何かあった一つのことであることを用意しているということがあればそれは何かなあと。その辺になってくると非常に宗教的な話になってくる。

僕は今までと違った関心で、いのちというものをつまみたい。九鬼周造の偶然性の問題のなかで「遇うて空しう過ごすなかれ」というのは浄土の教えで、人が会うというのはたまたまで、そのことに根拠はない。だからといって無意味だと考えてはいけない、空しく過ごしてはいけないよという。

西洋は必然性の哲学ですよ。われわれが何か出来るというときには、因果関係の中ではっきりした筋道を考えますけど、そうではなくてなぜ私がココに来て、この人と会って、この人は死ぬのかというの、その偶然の中で根拠が見つかからない。でも生きていかなければならないというときに、どうするかというの、今までのキリスト教的な倫理では語れない問題を僕は持っていると思う。

秋田●仏教ではいわゆる必然と



演劇という関係性の中で、そういう存在の交換を行っている。さらに言うならお寺とい

か、絶対というのはいらない。すべての事象というのは相互に関わっていてその中において、個というものはあるし、だからお蔭様という世界に対する感謝と関心を忘れないのです。その自分の立ち位置は、自分が一人称の主語ではなくて、全体の中において自分がいる、という三人称の視点をもちえているその基盤に教えがある。應典院にいれば劇団がやって来ますが、彼ら彼女らの多くは

う空間にあることで死者や無縁という他者にも出会ってほしいし、そのつながりに気づいてもらいたい。本当の表現ってその関係性の気づきのなかで、鍛えられていくものだと思う。

西川●CSCDの中では、僕よりは應典院の活動に近い人はいっぱいいる。僕らは一緒にするとしたらどういことが出来るのかなあと考えますが、とにかく應典院のできごとを見にきたいというのがありますよね。そのためには、まず会うということをしなないと。

今は、会うことが矮小化されています。まず目的がありきで、寄り道ができない世界にいる。そうではなくて会うことをできるだけドラムチックに始めて、あとをどう引き受けるかです。

秋田●今日の應典院は、演劇の仕込みで若い演劇人の集まり、お墓

参りの人がロビーでくつろいでいる。多様な人がここにいて互いを了解しています。多様な出会いが生まれる可能性がある。そういう意味でこの場所が定点にあり続けること、それが重要だと思つています。

今日はありがとうございました。

※大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)……「教養・デザイン力・国際性」を涵養するという大阪大学の教育目標と「市民に信頼される科学・技術者」の養成という使命を達成するための核となる機関として位置づけるとともに、「産学連携」とならぶ大阪大学の社会貢献のもう一つの軸である「社会学」の窓口もしくは拠点を目指し、2005年4月に設立された。

※ALS(筋萎縮性側索硬化症 Amyotrophic Lateral Sclerosis)……筋肉を動かす運動をつかさどっている神経(運動ニューロン)が変性して、運動機能が失われていく病気



秋田光彦主幹から……

# こころをい

呼吸するお寺・應典院の、5月〜8月の活動記録です。  
関連のエンディング事業なども併せて報告します。

## 5月

- ◇7日……「お寺の居前」10周年記念の紙芝居展が應典院2階ロビーで開催。宮本直樹さん、大崎信久さん二人の僧侶の努力の足跡を一望に。感動。
- ◇9日……京都大学矢守克也助教授と防災教育ビデオ撮影について打ち合わせ。パドマ幼稚園が協力。
- ◇12日……東京グラントホテルで全国曹洞宗青年会の30周年記念大会で講演。対談のお相手は仏教学の泰斗・奈良康明先生！
- ◇14日……寺子屋トーク「生老病死のコミュニケーション」。
- ◇15日……2000年のスタート以来、名物企画のいのちと出会う会が通算50回記念を。ゲストに医師の谷社吉さんとケースワーカーの入佐明美さん。世話人の石黒良彦さんの熱意の賜物。100回に向けてがんばろう！
- ◇19日……慶應義塾大学「生命の教養誌」で講義。1、2年生の若者に仏教のいのち観について語る。熊倉敬聡助教授のエスコート。
- ◇26日……美術家の伴野久美子さ

## 6月

- ◇2日……美術家大久保英治さんと初面談。12月の当寺での展覧会に協力を快諾したく。まるで現代の遊行僧のイメージ。
- ◇3日……天王寺区保護司会総会。
- ◇4日……石井聰互監督の新作『鏡心』の應典院上映会。ゲストは伊田広行さん。初めて見るハイビジョン上映のクオリティに驚愕。12名と盛況。夜は石井監督と久々に痛飲。
- ◇5日……引き続き『鏡心』2回上映。ゲストは甲斐賢治さんとビジュアルアーツの学生たち。石井監督の一言一句に作家魂が響く。
- ◇8日……新たに應典院に安置する十一面観音祀堂再建について、高口恭行先生はじめ建築業者らと打ち合わせ。秋彼岸に開眼の予定。
- ◇9日……浄土宗事務庁で、八百五十年遠忌事業委員会に出席。

テレビや演劇などメディア事業について意見交換。

- ◇11日……映画「カーテンコール」の完成披露上映会。佐々部清監督ほか配給宣伝関係者が大挙来山、2回上映とも満杯の盛況。終了後、シンポジウム「わが街のコミュニケーションシネマ」開催。シネ・ヌーヴォオや京都シネマなど関西の映画館事情についてゲストと語り合っ。
- ◇12日……大蓮寺墓供養。引き続き護持会総会。
- ◇18日……パドマ幼稚園の父の日参観日で予定した講師の事故で、急遽ピンチヒッターで演台に立つ。準備不足で冷や汗もの。
- ◇19日……上町台地からまちを考える会2周年大会。「持続可能」をテーマに多彩なゲストと語り合い。
- ◇27日……應典院寺町倶楽部の第9期総会。発会以来の組織を改め、お寺との連携を強める方針に転換、いっそうの活性化を目指す。

## 7月

- ◇30日……東京出張。東京大学付属高校に汐見純幸先生を訪ねる。NPO法人子ども危険回避研究所で打ち合わせ。
- ◇3日……生け花の末生流中山本甫会の夏季講座で記念講演。新大阪メルパルクにて。
- ◇5日……大阪経済大学特殊演習「演劇をマネシメントする」最終講義。全8回に渡った講義を学生28名と語り合える。
- ◇13日……映画「カーテンコール」の白井正明プロデューサーと関西の宣伝会議。
- ◇14日……多治見市の脇之島小学校の民間人校長山田純二先生を訪ねる。
- ◇16日……空堀の直木三十五記念館で、「昭和の映画を語るシリーズ」第1回。ゲストの弁護士坂和章平先生と語り合っ。

## 8月

- ◇19日……エンディングセミナーで「現代お墓事情」として変遷する都市のお墓について述べる。30名の参加。
- ◇22日……浄土真宗本願寺派の住職教化研修会で「現代のお寺をプロデュースする」の講演。
- ◇25日……大阪市住宅局の一行と今後の上町台地のまちづくりについて将来のプラットフォームを踏まえ意見交換。創教出版の株主総会。
- ◇27日……総幼研の教研大会。東京パシフィックホテルにて。28日まで。
- ◇29日……炎天下、寺町界隈を美術家の大久保英治さんと歩く。年末の展覧会のイメージの交換。
- ◇31日……恒例の新ぼとけ合同供養会。8月に新盆を迎える13家28名が参詣。いよいよお盆月がスタート。
- ◇1日……日本銀行「にぎぎん」と初面談。12月の当寺での展覧会に協力を快諾したく。まるで現代の遊行僧のイメージ。
- ◇3日……天王寺区保護司会総会。
- ◇4日……石井聰互監督の新作『鏡心』の應典院上映会。ゲストは伊田広行さん。初めて見るハイビジョン上映のクオリティに驚愕。12名と盛況。夜は石井監督と久々に痛飲。
- ◇5日……引き続き『鏡心』2回上映。ゲストは甲斐賢治さんとビジュアルアーツの学生たち。石井監督の一言一句に作家魂が響く。
- ◇8日……新たに應典院に安置する十一面観音祀堂再建について、高口恭行先生はじめ建築業者らと打ち合わせ。秋彼岸に開眼の予定。
- ◇9日……浄土宗事務庁で、八百五十年遠忌事業委員会に出席。

應典院寺町倶楽部  
主催の準備  
ラインナップ

いのちと出会う会

名物事業・いのちと出会う会は、毎月第3木曜日(18:30開会)、應典院を会場に開催しています。参加はどなたでもOK。生と死、人生の質、いのちのありかたなど、話題提供者の体験談をもとに、参加者どうして話しあいます。気軽な雰囲気です。どうぞお気軽にお越しになってください。

2006年は、1月はお休み、2月からの開催になります。詳細は、ホームページ (<http://www.outenin.com>) にて近々紹介します。

乞うご期待!!

本年も、應典院寺町倶楽部にご支援・ご協力を賜りまして、ほんとうにありがとうございました。

2006年も、スタッフ一同、力を合わせてがんばりますので、どうぞよろしく願いいたします。



▶速報1

日時:06年1月14日(土) 22:00~  
NHK教育テレビ・ETV特集  
「お寺ルネッサンスの時代を拓く」

(仮)

文化人類学者上田紀行さんと秋田光彦主幹の対談を放送!

▶速報2

應典院の東京進出!

8年間の全貌を描く4時間イベント!

「日本で一番若者の集まる寺~應典院のインターフェース、全部教えます」

日時:06年1月28日(土) 14:00

会場:青松寺観音堂(東京港区・愛宕)

仏教ルネッサンス塾特別企画。

ゲストは汐見稔幸東大大学院教授。

参加費:500円

問合せ:青松寺 TEL03-3431-3514

應典院寺町倶楽部の  
ニュースレター

サリュ  
Vol. 46

編集後記

2005年もいろいろありました。

- ・第2回大阪・アート・カレイドスコープ協賛事業「out○in展」(3月21日~) 若手美術家とパフォーマンスグループ、劇団が應典院の場を解釈したアートイベント。
- ・大阪経済大学「演劇をマネジメントする」特殊講義を監修(4月26日~8回) 舞台芸術の現場そしてアートマネージャーを大学につなぐ役割を担う。
- ・第43回寺子屋トーク「生老病死のコミュニティケア」(5月14日) 多死社会のコミュニティケアのあり方を多くの参加者と考える寺子屋トーク。
- ・第50回いのちと出会う会「いのちと出会うということ」(5月15日) 生老病死、いのちを語り続ける会が50回を迎え、実施した記念イベント。
- ・space×drama2005(7月~8月) 若手6劇団が協働し実施する舞台芸術祭。優秀劇団には満月動物園が選出される。
- ・響きの宇宙風の曳航(8月4日) 戦後60年、モンゴル僧の声明と長屋和哉氏のパーカッションの演奏で平和を願ったコンサート。
- ・第3回大阪・アート・カレイドスコープ「do art yourself」(12月5日~) 大阪の8つのアート系NPOが大阪府と協働したアートイベント。次号で特集。

と、アート、エンディング、いのち……。今年もさまざまなジャンルの催しが應典院を交差しました。2006年に向けての準備も始まりつつあります。来年もどうぞよろしくお祈りします。

(大塚郁子)

■発行日  
2005年12月20日  
■編集人  
秋田光彦  
■スタッフ  
池野亮光、大塚郁子、田中いずみ  
■発行所  
應典院寺町倶楽部  
〒543-0076  
大阪市天王寺区下寺町1-1-27  
TEL 06-6771-7641  
FAX 06-6770-3147